

世田谷村日記

石山修武

一月三〇日 日曜日

M氏から送られてきた資料読む。ここまでM氏の通信のエネルギーが膨大になると流石に私もその渦に巻き込まれてゆきつつあるのを感じる。マ、いいさ他人に導かれて行くところまで行ってみよう。十時屋上菜園に上り少しばかり土を掘り返してみる。生ゴミを埋める。富士山が近い。十一時過散歩。文房具屋でインクを買ってコーヒーショップで休む。モンブランのインクビンのデザインは実に良い。重さといい、手ざわりといい、時代の流れにポツリと孤立しながら風格がある。ホレボレとするなあ。午後銅版画すすめる。十七時過世田谷村発。十八時過西国分寺、東福寺。宮本常一先生二十五回忌。偲ぶ会。宮本千晴氏と三十五年振りの再会。相沢君、真島君等と会う。相沢君から宮本先生の多くの写真を見せて貰う。吉阪隆正先生との写真が数枚あり、焼増して送つてもらふ事を約す。川合健二との写真もあるそうだ。遠くの島根県から山崎氏も上京され読経して下さった。宮本千晴氏と話しが出来て良かった。相沢君から川合健二邸保存について相談を受ける。鈴木博之藤森照信にもそろそろ相談したほうが良いかも知れぬ。宮本常一門下一党らしく誠に善良な人達の集まりであった。二十二時過散会。宮本常一の故郷周防大島から送られてきた水仙の花をいただいて帰る。二十三時過世田谷村帰着。

宮本千晴氏も率直な実感を言っていたが、日本の都市農村を問はず、風景の絶望的な汚さ、品性の無さの元凶は何なのか。その汚さの中で暮らしている事が感性そのものを破壊している恐ろし

さの現実には計り知れぬものがある。地方都市、特に農村部の風景の悲惨さは戦争の風景、戦場そのものではないか。その戦場では風景がジワジワと人間の品性を殺し続けている。人間が作った近代の風景が人間を殺している。宮本常一が撮り続けた日本の戦後から高度経済成長期までの風景の記録が痛烈に突きつけるのは建設の悲劇でも言うべきか。建築家は何をしてきたのか。宮本常一の背中を眺めながら歩き続けている結城登美雄の農村計画は大事件なプロジェクトであるのを自覚する。

一月三十一日

月日が流れてゆくのが恐ろしい位に速い。もう一月も終わりだ。朝、大版の銅版画ほぼ仕上げ。軽いタッチの鉄筆の使い方が解った。何だかんだと眼の前の壁を乗り越えてゆく時にテクニクを身につける事が出来るのを知る。これで二点できた。去年より進歩している。

十時半研究室。住宅ミーティング。十二時修了。十四時四〇分CEMAミーティング。十六時迄。広島より水本先生等広島県の方「ひろしまハウス」に関しての打合わせに来室。カンボジアの洪井さんも交えて十八時迄。私はなにしろやり続ける。今日は洪井さん達と会食を予定していたが、何となく気が乗らず二〇時半世田谷村に戻る。